

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

A Synchronic and Diachronic Study of *That*-clauses in English
(英語における *That* 節に関する共時的・通時的研究)

氏 名

近藤亮一

論 文 内 容 の 要 旨

英語において、*that* 節を含む文の文法性は補文標識 *that* の有無に左右されることがあると報告されてきた。本論文の目的は、生成文法理論の枠組みの下で、*that* 節を含む構文とその歴史的変化に対して原理的な説明を与えることである。

1 章では、本論文の目的と構成を提示する。

2 章では、カートグラフィー分析の下で、新しい節構成を提案し、ある要素の移動が複数の基準や素性を同時に満たす場合、複数の機能主要部は単一の主要部として機能すると主張する。この節構成は主語 *wh* 疑問文と目的語 *wh* 疑問文の非対称性を説明することができるだけでなく、場所句倒置構文の統語的性質を説明することもできると論じる。

3 章では、歴史コーパスを用いて、英語史における *that* を伴う補文と伴わない補文の分布を調査し、顕在的な補文標識 *that* と空の補文標識が歴史的にどのように変化してきたのかを明らかにする。具体的には、補文標識 *that* は指示詞 *that* から発達したという標準的な仮定の下、補文標識 *that* は英語史のある時期まで指示詞の性質を保持していたと主張する。*that* を伴わない補文に関しては、空の補文標識は接辞的であるが、英語史において、統語的接辞から音韻的接辞に変化したと主張する。

4 章では、2 章で提案された節構成を埋め込み節に適用し、*that* 痕跡効果と関連する現象に対して原理的な説明を与える。本章の分析と 3 章の分析を組み合わせることで、初期英語において *that* 痕跡効果がなかったという事実に対してもまた原理的な説明を与えることができる。

5 章では、文主語構文と外置構文の統語構造を明らかにする。本章では、二種類の外置構文の存在に注目し、それらの統語的違いに対して原理的な説明を与える。さらに、3 章の分析を採用することで、外置構文の歴史的変化と文主語構文の歴史的発達に対して原理的な説明を与える。





